

2025年度 大学入学共通テスト

「歴史総合, 世界史探究」の分析 **世界史**

学校法人 河合塾 世界史講師 井上 徳子

1 はじめに

2025年度は新課程入試元年であり、共通テストはこれまでの「世界史B」に代わって「歴史総合, 世界史探究」となった。どのような問題となるのか、判断材料は試作問題(2022年公表)しかなく、非常に注目されたが、試作問題をおおむね踏襲していた。

大問5題中、**第1問**が「歴史総合」(25点)、**第2問**以降が「世界史探究」(75点)で、平均点は66.12点だった。これまで共通テスト「世界史B」の平均点は、高卒生が現役生よりかなり高いことが特徴であり、本年度は現役生中心の「歴史総合, 世界史探究」の平均点が高卒生をみの「世界史B」の平均点(68.20点)に近いこと、これまでの「世界史B」の平均点(2024年60.28点、2023年58.43点)を大きく上回っていることから、今年の問題は現役生にとって取り組みやすかったことがうかがえる。

2 全体の概略

分量：全体の分量は**表1**の通り(*はうち歴史総合)。

表1 共通テスト2024年度「世界史B」及び試作問題と2025年度「歴史総合, 世界史探究」の分量の比較

	2024 本試	試作問題	2025 本試
問題構成	大問4題	大問5題(*1題)	大問5題(*1題)
マーク数	33	33(*9)	32(*8)
ページ数	32ページ	40ページ(*10ページ)	34ページ(*9ページ)

会話文の量が減ってページ数が減少するなど、試作問題より分量が減っていたが、資料や会話文を丁寧に読み込む必要があったため、時間的な余裕はなかっただろう。

時代：「世界史探究」では前近代史の出題が多く、選択肢の一部に第二次世界大戦後の内容を含む小問は3問だった。しかし近代史から出題された「歴史総合」を加えると、前近代史と近現代史の比率はほぼ同じであった。

地域・分野：「世界史探究」では欧米史とアジア・ア

リカ史の比率がほぼ同じだったが、「歴史総合」でアジア史(日本史を除く)の比率が高かったため、全体としてはアジア・アフリカ史が多かった。なお、「世界史探究」の欧米史では西ヨーロッパ史が、アジア・アフリカ史では中国史が多かった。分野では政治史や社会経済史が多かった。

形式：大問5題中4題が、授業中の会話や生徒の発表準備など、生徒の主体的な探究の場面を扱い、残りの1題も資料の適切な活用をテーマとしており、学習指導要領に沿った出題であった。そして、史料文・メモ・パネル・図・グラフ・表などさまざまな資料や会話文から情報を読み取る必要がある問題がほとんどであった。

3 歴史総合(第1問)

マーク数は、試作問題の9から1つ減って8となり、テーマの内訳は、近代化が4問、大衆化・グローバル化がそれぞれ2問で、近代化の問題が半分を占めた。

表2は「歴史総合, 世界史探究」の歴史総合と「歴史総合, 日本史探究」の歴史総合の比較である。「歴史総合, 世界史探究」の歴史総合は、日本史のみの小問はなく、試作問題と同様、世界史が占める比率が高かった。

表2 2025年度共通テスト歴史総合の内容の比較

歴史総合の出題分野	「歴史総合, 世界史探究」	「歴史総合, 日本史探究」
日本史のみの小問	なし	あり
世界史のみの小問	あり	あり
日世融合の小問	あり	あり

●例題1 2025年度共通テスト本試：第1問 問5 **5**

問5 1班は、1920～1930年代の東アジアの女性の装いについて調べ、**パネル1**を作成した。**パネル1**から読み取れることや、その背景について述べた文として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 **5**

パネル1

- ・欧米の最新の装いや髪型を模倣した女性は、1920年代後半の東京や大阪で、モダンガールと呼ばれた。
- ・大衆化の進展に伴い、1930年代の京城や上海、天津などでも、モダンガールの装いが見られた。

・上海で1931～1937年に発行された女性誌『玲瓏』では、モダンガールが表紙を飾ることもあった。

- ① 日本のモダンガールと呼ばれた女性の髪型は、ロングヘアーを特徴としていた。
- ② 東アジアでは、独立国、植民地、租界を問わず、モダンガールの装いが見られた。
- ③ モダンガールが闊歩した1930年代の京城には、統監府が設置されていた。
- ④ 『玲瓏』が上海で創刊された当時の中国は、中華人民共和国である。

河合塾が集めたデータ（以下同）で、**例題1**は「歴史総合」の中で一番正答率が低かった問題である。①は日本史、②③は空間軸、③④は時間軸を扱った、**日世融合問題**である。また、**パネル1**の内容を読み取り習得した知識と照らし合わせながら解く必要がある点、「探究」になって増加した背景を問う問題を含む点から、「歴史総合、世界史探究」の典型的問題と言える。①のモダンガールは、帝国書院の『明解歴史総合図説シンフォニア』（以下、図説）p.139図モガ（モダンガール）の写真のように、ショートヘアーである。②は「独立国、植民地、租界」が**パネル1**のどれに該当するのか判断しなければならず、租界の概念理解が必要である。**パネル1**は「上海、天津」としか述べていないため、上海や天津内の租界ではない地域でモダンガールの装いが見られたのではないかという疑念が浮かびはするが、①③④が明らかな誤文なので②が最も適当と判断する。②③は京城がどこか分かることがポイントである。教科書『明解 歴史総合』（以下、教科書）や図説の地図では、現在のソウルを韓国併合前は漢城、併合後は京城と書き分けており、教科書添付のQRコードから見ることのできるコンテンツ「用語解説」中の「朝鮮総督府」には、「京城（漢城から名称変更。現在のソウル）に設置」という説明がある。教科書の徹底した活用が望まれる。正解②の選択者41.5%に対して③の選択者が36.2%おり、おそらく統監府と総督府の区別がついていない。また、そもそも京城が分からないと判断できない。いずれにしろ知識の有無で点差がついた問題と言える。

4 世界史探究（第2問～第5問）

世界史では、センター試験・共通テストともに新課程導入や制度変更が行われる際、新課程や新制度を先取りする問題が移行前から出題されてきた。本年度は初の新課程入試ではあったが、すでに近年の「世界史B」で世界史探究的な問題が出題されていたこと、試作問題の方向性から大きく変わっていなかったことから、受験生の混

乱は少なかったと思われる。また、求められている知識も、従来よりさらに基本的な情報に絞り込まれていたため、難易度は「世界史B」より易化していたと言える。だからといって、すべての問題が平易だったわけではない。

●例題2 2025年度共通テスト本試：第3問 問7 22

問7 カニンガムと同様に、外国人として考古学的な調査を行った人物に、スタインがいる。スタインの中央ユーラシアにおける調査実施の許可に関わって残された現地政府の公文書の抜粋（資料4）から読み取れる事柄あ・いと、資料4が書かれた時期の政治的背景に関して述べた文X～Zとについて、最も適当なものの組合せを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 22

資料4

- ・スタイン氏が初めて我が国にやって来たのは、8か国連合軍が都を占領した時であり、外国人は国内で好きなように振る舞うことができた。
- ・今日までの30年にわたるスタイン氏の調査による敦煌文書や仏像の発見は、アジアの古代研究に新時代を開いた。しかし、これらは皆、国家の貴重な宝物である。外国人がこれを研究するのはいいのだが、盗み去ることは不法行為である。

資料4から読み取れる事柄

- あ 現地政府は、外国人による学術調査を奨励し、文化財・遺物を国外において保護する必要がある、と考えていた。
- い 現地政府は、外国人が学術調査を利用して文化財・遺物を国外に持ち出していることを危惧し、それらを自国において保護する必要がある、と考えていた。

資料4が書かれた時期の政治的背景

X 明治維新に倣って、立憲制を目指した国制改革を進めようとしていた。

Y 国家主導の下で、改革開放政策が進められていた。

Z 全国の統一的支配の実現を目指して、北伐が進められていた。

① あ－X ② あ－Y ③ あ－Z

④ い－X ⑤ い－Y ⑥ い－Z

例題2は、「世界史探究」の中で一番正答率が低かった問題である。①～⑥の選択率を挙げると、④⑤⑥がそれぞれ41.3%、30.9%、20.9%で、①②③がそれぞれ1.9%、2.7%、2.0%であったことから、い が正しいとほぼ判断できており、文章の読み取りはできている。しかし、④⑤⑥に選択者が分散し、正答⑥が一番少ない結果となっていた。スタインが初めて中国に来たのは「8か国連合軍が都を占領した時」すなわち義和団戦争中の1900～1901年の間であり、彼の調査は「今日までの30年にわたる」ので、資料4が書かれた時期は1930～1931年の間と分かる。そしてXYZには史実の誤りがないため、時期で判断することになる。つまり、④⑤⑥に選択者が分散し、しかも正答者が最も少なかった原因は、資料4が書かれた時期、あるいはXYZの時期が分からなかったためであり、時期についての知識が乏しい受験生が多いことが分かる（なお、Zの北伐は1920年代で、時期的には背景として妥当だが、北伐は1928年に完了しているため、北伐が「進められて」いたことではなく「完

了して」いたことが背景ではないかと考え、判断に迷った受験生もいるかと思うが、他のXYが時期的に大きく外れているので、⑥を正解と考えるしかない。

●例題3 2025年度共通テスト本試：第2問 問3 11

藤井さんのグループは、都市 ウ の歴史について情報を集め、その情報の一部を準備メモに記録した。

準備メモ

- ・作家プーシキンが書いた作品『青銅の騎士』は、ウ で洪水の被害が頻繁に生じたことに着想を得たそう。
- ・作家ゴーゴリは、ウ の気候の厳しさを描くことが多い。例えば、彼の作品の主人公の中には、この都市の「常として、風は四方八方から、横丁という横丁から彼に吹きつけた」ために体調を崩し、最後には死んでしまう者もいる。
- ・作家ドストエフスキーも、ウ に住んでいたことがある。
- ・1905年に、「血の日曜日事件」が起こった。
- ・1918年に、他の都市に首都が移された。
- ・1991年に、都市の名称が改めて変更された。

問3 藤井さんのグループは、準備メモ中の空欄 ウ の都市に関する出来事と、その出来事の背景について発表した。その内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

11

- ① この都市が急速に繁栄したのは、その当時の君主がギリシア正教に改宗し、聖堂が次々と建てられたからです。
- ② この都市が首都となったのは、その当時の君主が、初めてツァーリという称号を名乗り、それに見合う都が必要とされたからです。
- ③ この都市から1918年に首都が移されたのは、臨時政府が、自分たちと従来の体制との断絶を明示したかったからです。
- ④ この都市の名称が1991年に変更されたのは、その当時の指導者による改革政策を通じて自由化が進み、過去の歴史的経緯についても批判的な議論や見直しが可能になっていたからです。

例題3は「世界史探究」の中で2番目に正答率が低かった問題である。ウ を特定する際、楽をしようとウ の前後に目を通してだけでは解けない。準備メモ全体を読み、「1905年に、『血の日曜日事件』が起こった」という部分からペテルブルクと判断したうえで、正誤判定する必要がある。結果、正答④の選択者は34.1%で、③の選択者34.3%より下回っており、ロシア革命についての知識が不足していたことがうかがえる。

5 共通テスト「歴史総合、世界史探究」の特徴

以上のように、「歴史総合」・「世界史探究」はともに、資料（史料文・メモ・パネル・図・グラフ・表など）や会話文などから必要な情報を読み取り、習得している知識と照らし合わせながら総合的に判断する問題がほとんどである。例題3を例にとると、資料（準備メモ）から必要な情報（1905年に、「血の日曜日事件」が起こった）を読み取り、習得した知識と照らし合わせてウ にペテルブルクが入ると判断し、①～④の選択肢がペテルブルクの説明として妥当かどうか思考し判断する。その

際、ペテルブルクの関連情報（ロマノフ朝の君主ピョートル1世が北方戦争中、すなわち18世紀初めに建設して都としたこと）を想起する必要がある。

センター試験時代の正誤判定問題は「ペテルブルクはイヴァン3世によって建設された。」というような選択肢が多かった。すなわち「×イヴァン3世→○ピョートル1世」のような、単語の入れ替えで正文となる正誤判定である。しかし、「世界史探究」は、このような単語の入れ替え問題は少数で、選択肢の文は正しく、問いに合致しているかどうか判断する問題が主流であり、その問いそのものも、資料や会話文を読まないと分からない。

6 対策

その1～知識の底上げ

つまり、選択肢が正しいかどうか思考して判断するためには、資料や会話文を正確に読み取る読解力、知識を正確に習得している知識力（言い換えれば、学習指導要領の「知識及び技能」）の両方が必須である。そもそも、知識がなければ資料や会話文のどこがヒントなのか分からない。したがって、知識の底上げが必要である。

「世界史探究」では「基本的な情報に絞られていた」と上述したが、それは「世界史B」より学べき知識量が減ったという意味ではない。扱う用語量は確かにかなり減少したが、用語を直接挙げずに出来事の時期・背景・経緯・因果関係・影響など内容を問う問題が増加している。知識力とは、細かい史実を多く知っていることではなく、出来事の内容や特徴、歴史の中でその出来事の持つ意味を理解することである。教科書などを利用した理解を深める学習が必要であり、用語の暗記だけでは対処できない。今回正答率が低かった例題は、すべて知識力で点差がついていた。ヨコのつながり（空間軸）やタテのつながり（時間軸）を意識した学習を心がけ、教科書や図説の図版やコラムなどにも目を通しておくとよい。

その2～実戦力の向上

問題の分量の多さや、また形式に慣れるためにも、模試や市販の共通テスト対策用問題集などを活用して、問題演習量を積極的に確保するとよい。

7 今後の「歴史総合」について

本年度の「歴史総合」は世界史からの出題が多く、日本史のみの小問はなかったが、この傾向が続くとは限らない。世界史の学習の際に、同時期の日本がどのような状況だったか確認する癖をつけておくとよいだろう。